

活動報告

東西文明論の再構築・ユーラシア文明論序説
——滞英成果を中心として——

濱 田 英 作

- 一．前言
- 二．滞英記録—観察，分析，及び考察
- 三．結語

一．前言

過ぐる二〇一一年三月十一日の東日本大震災は，日本全国の，少なくとも東日本の人々の生活を完全に破壊顛倒し去ったと言ってもよいだろう。そして福島第一原子力発電所の恐ろしい爆発とその後の放射能汚染は，その程度の軽重について諸説はあれ，私たちの外面に，また内面に今なお暗雲を立ち込めさせ，黒く不吉な影を投げかけ続けている。

それはまた，リーマン・ショックによって手ひどく傷ついていた日本経済がようやく回復の兆しを見せかけた矢先に襲来した，新たな，そして徹底的な打撃であり，その結果齎された閉塞感とよって来る憤懣は遣り場を求めて敵を外部に探し，折しも国際的に抬頭著しい他の東アジア諸国の政治経済的情勢とも相俟って，二〇一三年初頭現在，それは共振的なショービニズムの波動となり，地域的不安定要素として我々の眼前に突き付けられて来ているのである。

こうした危機的状況は，あだかも大正関東大震災以後の日本の破滅的進路を髣髴させるが，前者の覆轍は絶対に避けねばならないことは改めて言うまでもなく，またそれは，多数の東アジア留学生を抱える本21世紀アジア学部 に課せられた重き課題でもある。これ即ち，『「アジア学」とは如何』という永遠の命題以外のものでなくして，果して何ぞや。

小論筆者は，二〇一二年四月より九月まで，国士舘大学学外派遣研究員制度により，英国ロンドン大学アジア・アフリカ研究所（School of Oriental and African Studies, University of London, 略称SOAS）客員研究員（Academic Visitor）としてロンドンに滞在する機会を得た。ここに大学および学部に対して，深甚なる謝意を表するものである。また受け入れ担当教員としての労を取っ

て下さった、SOASの Professor Bernhard Fuehrerにも、併せて心よりの感謝を申し添える。

筆者の今次の滞在における研究テーマは「欧州十九世紀～二十世紀前半におけるアジア研究に対する再確認と検討」というものであった。

この観点から筆者は、大英博物館を始めとする英国各所の博物館を調査し、文献を渉猟し、他方では女王エリザベス二世在位六十周年記念Jubilee年及びロンドン・オリンピック並びにパラリンピック開催年という稀有なタイミングにも恵まれて、英国乃至欧州の最先端事情と風潮にも一定程度触れることができたものと考えている。

また他方では、一地域としての英国に滞在するという体験の中で、筆者は、ヘレニズムの西端到達点とも言うべきRoman Britainに関していささか徹底的なfield workを行うチャンスも得て、その結果として、「英国は何故かくもRoman Britainに興味を持つのか」という点にも、改めて関心が向くことにもなった（たとえばフランスが、自国における同じローマ征服時代であるGallo-Romainに対してこれほどの興味を示すということはない）。これについても、考察と分析中で若干の萌芽的結論を見出したところである。

そしてこれらの成果から総合的に得られたものは、筆者の専攻領域たる「シルクロード・東西交渉史」より導き出されたところの、ここ年来のテーマである「比較地域学——東西文明論／ユーラシア文明論の再構築」に対する新知見であり、新たな認識であった。

従ってここでは、滞英中のフィールド・ノートを基に、かつ印象の新鮮さを失わぬことを希求しつつ、活動報告として考察の一端を披瀝することとしたい。

なお個人情報に関する事柄、及び文体には当然の修正を加え、同時にessay（試論）としての求められるべき体裁を整えたことを諒とせられたい。他方、固有名辞や諸用語については、英語をそのままに使用した部分もある。さらに、語句に関する注釈が必要な場合は、その都度【括弧】にて加えた。

また、当エッセイ中の議論にはなお生硬な部分も多く、かつ熟成への止むを得ざる過程として考察の重複も多々見受けられることをも、同時にご海容あられたい。

二. 滞英記録——観察、分析、及び考察

●四月二十日記

ロンドンでは天候不順で肌寒く雨模様で、到着前に期待していた、あのヨーロッパらしいからりと乾燥して輝かしい春の陽光の恵みがほとんどない。どうやら低気圧が、判で押したようにブリテン島の真上を通過するらしいのだ。

到着以来早速、ロンドンの各所を回ってみて思ったことだが、基本的には昔旅行した頃と変わっていない。それが以前ならば歴史を大切にしているということで、むしろよい例として挙げられていたわけだが、今ではそれが逆にイギリスを縛ってしまっているところもあるかとも思われる。たとえば私の住んでいる住宅地でも、外観をちょっとでも変えることは許されない。それはしかし、インフラ整備の上では逆に非常に不便となる。そして、今では東京およびその文明が、さまざまな

意味でロンドンの模範のようになっているのは皮肉なものだ。至る所にある回転寿司の店、ファーストファッションの店、それから不思議な日本語のブランドのアパレルショップ。このロゴの入ったカジュアル服を着た人を、街に出ると大勢見かける。

かつて日本では「失われた二十年」と言われた。しかしこちらに来ると、それほどには思われない。日本はけっして豊かさ、QOLを失ったわけではなかったのだ。確かに一歩進んで二歩下がるような感じでやってはきたが、その「一歩」は、その前の「一歩」とは質的に違いながら進んできたような気がする。つまり、ロンドンに比べて、日本がいつの間にか変わりすぎてしまったということなのだ。ただその変化は、やはりうわべだけかも知れないし、また大震災以後どうなるかはわからないところだ。

まずは英国到着当初の印象を記しておく。

●四月二十五日記

当地の生活にも次第に馴染みはじめる。

今日は、大英博物館を見学して考えたことを記しておく。特に第五七室の展示配置を中心にしてみたい。

ここは新石器文化、なにかんづく耕作の開始と伝播について説明している部屋にあたる。つまり、人類文化史および文明史研究の上で、最も根源的かつ重要な展示室であるということだ。

まず何より興味深かったのは、ヨーロッパから西アジア（イラン）までを同一地域として捉えているその地理観であり、ほぼ現在の中近東に擬せられる農耕発祥の地点から、オリエントとヨーロッパの歴史（時空間）を同時に始めて拈げていくという観点である（ちなみに、両者の架橋が北部トルコとアルメニアである）。さらに感心したのが、ちょうどこの第五七室のあちらとこちらの出口から、それぞれオリエントとヨーロッパの展示室が連なっていくという、実体験的でありダイナミックな構成だ。そしてそこに、最新の研究知見に基づいて、青銅器時代を担ったプロト印欧語族、すなわちケントゥム族の拡大の軌跡が重ね合わされると、それは中央アジアのトハリスタンからシルクロードの天山南路を通り、北中国を越えて横断山脈を経由し、ついには雲南にまで達していくのである。

細分化され深化した地域文化研究の成果を承けて、いま改めて導き出されつつある、こうしたいわば新たなユーラシアセンリズムとも称すべき東西統合的・融合的世界観と、そこに立脚した歴史的・社会的・啓蒙的態度の出現というものは、極めて興味深く、また示唆的だ。そしてそれはおそらく、多民族・多文化・他宗教・多規範・多価値観がすでに実体として存在することを認めざるを得ない英国および欧州の現実を反映しているものだと思うし、またそうした止揚の融合への希求は、決して通文化的には中和され得ない現実の中で必死に共存を図ろうとする、西欧世界の苦闘と苦悩をも、また反映しているのではないだろうか。

このあたりの考察の中に、私が構築しようと試みている新たなユーラシア東西文明論の端緒があるような気がしているところだ。

●五月十六日記

少し春めいたかと思えば、また冬に逆戻りといった天候の繰り返しだ。

今日は、グリニッジに行った。改装完了したカティ・サーク号も見学した。ここもドックランドにつながるテムズ川沿線の再開発によって美しく整備され、その一方では古い街並みも残っていて、たいそう素晴らしいところだ。海事博物館も見事で、東インド会社の興亡の展示を興味深く見学した。このテムズ川から、海洋国家が始まったのだと改めて思った。十九世紀になって強欲グローバリゼーションが手におえないほど広がり、その結果として東インド会社の貿易独占が否定されたことが、かえってアヘン戦争を生んだのではないか、などとも考えた。

グリニッジ公園のObservatory [旧王立天文台、経度0、子午線が通る]の丘から見たロンドンは、ちょうど北の方に雷雲がかかり、稲妻も閃いて、あだかもConstable [十八世紀から十九世紀にかけての英国風景画家]の描く絵の如くだった。

●五月二十七日記

五月下旬に入ったある日、寒い霧が見る間に晴れて、いきなり快晴の空に陽光が燦燦とする天気になったのは劇的だった。しかし体調面からは、こうした激変はむしろ考え物だ。

さて今日は、ロンドン南部のClaphamにある、漱石記念館を訪れた。ここは漱石のロンドン生活における最後の下宿先で、今も住宅街は百年前の姿のままだ。明治時代人の教養と見識の深さと高さに、あらためて脱帽した。

漱石記念館見学後はロンドン市街地の外周部を回ってみようと考え、National Railに乗って、Crystal Palaceと言う駅で降りた。ここはAnerley Hillというところで、一八五一年のハイド・パーク万博展示館を、万博終了後の翌年に移築した場所なのだ。この展示館は鉄骨とガラスで造られ、そのために「水晶宮」と呼ばれた。

それ以後、ここはロンドン市民の郊外行楽地として賑わった（目黒雅叙園のように、ある種キツチュでキワモノ的なところもあったようだ）が、一九三六年の失火で全焼し、その幕を閉じる。以後この旧址には、もはやごくわずかの彫刻しか残っていない。

しかし、この「水晶宮」の炎上と消失は、あらためて考えると、まさに「近代」の終焉を象徴してはいないだろうか。クリミア戦争～ボア戦争～日露戦争～第一次世界大戦と、しだいに戦いが凄惨さを増し、近代ブルジョワ市民的価値観が転倒しつつヴィクトリア帝国が衰亡していく中で、それでも辛うじてmerryさを保っていた世界が、ついに崩れ去ったかというように思える。

この歴史を知って、私はただちに、飛行船ヒンデンプルク号 [一九三七年爆発炎上] のことをも連想した。そうして時代は、第二次世界大戦以後の「現代」に変わってしまうのだ。

●六月二日記

夏が来たかと思えば一週間しか続かず、ふたたび冬に逆戻りした。ジェット気流がイギリスの南を通っているので、それで低気圧が次々に寒い空気とともにやってくるという。さすがに異常気象

だと、こちらの天気予報でも解説している。

五月二十九日から六月一日までのウェールズ旅行の覚え書を記しておく。

首都カーディフは産業衰退後の再開発も進み、現在では落ち着いた地方都市といった感じになっている。名古屋というにはやや小規模で、宇都宮や松本といった感覚か。また少し足を延ばすと、St.Fagans National History Museumという施設があり、ここは要するに保存民俗博物館で、ウェールズ各地の民家や農家を移築して生活体験もできるということところだった。

翌日は、隣町であるNewportからさらにバスに乗って、Caerleonという発音もできないウェールズ名の田舎町にある、National Roman Legion Museumを訪れた。

ここにはかつてLegio XX Augusta [ローマ帝国第二十アウグスタ軍団] が長年駐屯していて、要塞、基地施設、浴場、円形闘技場などの遺構が残っている。もちろん、駐屯軍団兵の遺物も、墓石も多数発掘されている。夏になると、ロンドンからわざわざErmine Street Guard Re-Enactorsという、ローマ軍団を考古学的・歴史学的にできる限り正確に復元しているグループがやってきて実演をする現場でもある。したがって、観光地としてはきわめてよく知られている場所でもあり、まずは日本の「三内丸山」や「吉野ヶ里」といったところか。しかし相手はローマ帝国なので、縄文や弥生とはそもそも文明としての桁が違っている。この地を、半日の時間をかけて、心行くまで見学することができた。

イギリスは、Boudicca女王の反乱にも見られるように、ローマには手ひどく征服されているのに、そのくせローマ遺跡や軍団のことが大好きなのは面白いことだ。そういえば確かに、だれもケルト人やブリトン人の文化や生活や武具を復元したり、扮装 (Re-Enact) したりはしない。もちろん、サクソン人にもだ。やはり野蛮は嫌いなのだろうか。

●六月十一日記

今日は、National Army Museum, Imperial War Museum, およびロンドン塔の感想をまとめて書いておく。

National Army Museumは英国陸軍の歴史をたどる博物館で、その展示ストーリーから推察するに、現代英国陸軍の原型はクロンウェルの市民戦争の際に組織されたNew Model Armyに始まり、その意味 (現代につながるイギリス国家の形態は市民革命により作られた) からすれば、イギリスの建国神話、つまり国民統合形成神話は市民戦争 (クロンウェル戦争) から始まると、この陸軍博物館では考えているということだろう。それはちょうど、アメリカの建国神話が、むしろ独立戦争以上に、Civil Warとしての南北戦争であるのと同様だ。しかし距離を置いて見られるのはせいぜいボーア戦争までが限度で、そこから先の展示は寒気がして息苦しくなる。塹壕戦や総力戦というのは嫌なものだ。

また別の戦争博物館であるImperial War Museumは、第一次大戦と第二次大戦に関する博物館で、Monty [モントゴメリー将軍の愛称] の指揮戦車などが置いてある。V2号 [ナチ・ドイツの使用したロケット兵器] の実物には驚嘆したし、原爆Little Boyの使われなかった実物版はさすが

に恐ろしくなった。ホロコーストのコーナーもあり、そこは子どもは入れない。私も入ることはしなかった。また、「なんであなたはカーキを着ずに贅沢な服を着ているのか」や、「パンは控えめに」などといった標語ポスターもあって、イギリスにも「ぜいたくは敵だ」のような戦時中の感覚があったことを知ることができた。総じて言えば、ダンケルク撤退とロンドン大空襲（Blitz）が、イギリスの国民叙事詩になっているということを理解した。

ロンドン塔には、かつて大学生時代の一九七六年に来たことがある。しかしその時とは展示がまるで変わっていることに、大いに驚いた。どうやらヒストリー・チャンネルがスポンサーに入っているらしく、いかにもアメリカ人好みにドラマチック仕立てにストーリーを作っているのだが、ちっとも面白くない。昔のままに、陰々滅滅と、どきどき磨き上げた鎧や武器を並べてある方が、はるかに良いと思う。そしてその中に、いきなりヘンリー八世の鎧などが現役で置いてあるから、それがかえってドラマチックなのではないか。

そもそもロンドン塔のArmouryは今も英軍の武器庫のはずだから、現代兵器が何もなくなったら、あそこのものを持ち出して戦う用意ができていなければならないわけだろう。きっとCuratorの中には、現状に対して秘かに舌打ちしている人もいるのではないだろうか。

●六月十四日記

当地にはもう、夏が来そうにない。今週末も低気圧がブリテン島のすぐ西に居座り、風雨がきつという予報だ。

十三日には、Dockland [ロンドン市街南郊、テムズ川の旧ドック再開発新都心] のCanary Wharf [かつて西インド諸島貿易船の発着した河岸址] にある、Museum of London Docklandを見学した。

ここはBarbicanにある本館の分室にあたり、テムズ川とロンドン、特に舟運およびドックの発展史に焦点を絞った展示がなされていて、建物そのものも二百年前の倉庫をそのまま利用している。展示は英国の博物館に共通の、教育啓蒙方面を重視したインタラクティブな体験型で、しかし学術的にもしっかりしていて非常に面白く、啓発的だった。中でも、ローマ時代からサクソン時代までを重点的に見た。

展示のストーリーそのものは、ローマ時代～中世～近世（東インド会社、西インド、アフリカ貿易）～近代十九世紀・二十世紀初頭のドックの発展～ダンケルクとBlitz [ロンドン大空襲] ～戦後の衰退から再生というお定まりのコースで、これはグリニッジのMaritime Museumでも同じことだ。

この両者の展示の方向性は、よく似通っている。また双方ともに、「砂糖と奴隷の三角貿易」については、必ず触れなければならないものとして、一フロアにかなりのスペースを割いて展示説明がなされている。これはおそらく、現在のアフリカ系英国人に対する一種の申し訳のためにも作っておかねばならない、英国にとっての踏み絵としてのコーナーなのだろう。

さてそうして再開発が著しいドックランドだが、私が最初に取材に訪れた一九九〇年代半ばから見ると、雲泥の違いであるともいえるべき発展とその隆盛とには驚いた。現状を見ると、日本のお台

場よりも天王洲アイルよりも、また幕張よりも、はるかに成功しているだろう。LDR [ロンドン・ドックランド・レイル, 新交通システム] も混雑し、路線も大幅に延伸されていた。

現地に着したのは昼休み直前で、また珍しい晴天ということもあって、そここの水辺に椅子とテーブルを出したレストランには、携帯電話を耳に当てたスーツ姿のビジネスマンたちが大勢繰り出していて、実に活気にあふれている。かつてチャールズ皇太子が酷評したポスト・モダンの建築群も、予想とは裏腹に古びることもなく、改めて眺めると、このロンドンという土地のcontextにむしろぴったりの味わいが出てきている。時間をかけて踏ん張った甲斐があったということかもしれない。しかしお台場にしてもパリのデファンス地区にしても、同じような時間をかけてやっと現在の姿になってきているのだから、こうした再開発新都心の定着と熟成には、どうしてもそれなりの年月が必要だということなのだろう。

それにしても、テムズ川というものの規模の大きさを、ここに来ると如実に感じるができる。海の潮が上がってくるというのだから、これはもはや「川」ではない。それとまったく同様に、ロンドンは河川港であるとも、また河岸であるとも言えない。それはむしろ、江戸時代の日本語で言う「湊」、今でいう「湾岸」、河川湾岸、「灘津」とでも言うべきだろう。

さらにはこれに加えて、内陸深くに網の目のように伸びた運河までを視界に捉えた、有機的英国水運全体の考察が必要なのだろうが、さすがにこの博物館もその守備範囲はロンドンより下流のテムズ川と海外への広がりなので、そこまでは触れていない。とはいえ、なぜジェントリーの「囲い込み」が可能になったのか、あるいはこのあたりにその問題意識に対する鍵がありそうな気もするところだ。

話を日本に戻せば、同じような島国の日本に、これほどのスケールの河川コンセプトがあったかどうかを考えると、どうも徳川家康には、それがあったように思われる（秀吉と大坂の関係も同様かもしれない）。家康は、いわば江戸全体を、おそらく川越あたりまでのパースペクティブを持ったDocklandに仕立てたのだろうが、明治新政府はそのスケールを生かし切ることができずに、結局石川島あたりでお茶を濁すことになってしまったのである。

未来のロンドンとテムズ川の関係については語る能力を持たないが、大略以上のようなことを考えて帰宅した。

●六月二十三日記

今週は、三泊四日でヨークに調査旅行をした。天気は前半はよく、後半は雨と嵐だった。

ヨークは小さいけれども風格のある、また上品な古都として再生していて（とはいえ十八世紀以後のこと。それ以前はディック・ターピンとかガイ・フォークスの逸話のみという野蛮さだ）、日本でいうなら京都かとも思った。博物館では、ローマ時代の遺跡と遺物を十分に見学し、またミンスターについては、パリのノートルダムに匹敵する規模と偉容に感嘆した。

一方で、修道院の遺構を見て、ヘンリー八世が石山本願寺や比叡山を滅ぼした織田信長同様の人物であること、しかしこの人なしには、英国はスペイン・ポルトガル地中海文明の周辺の二流国の

ままだったであろうということ、などを考えた。さらに考察は進んで、徳川家康は寺請制度で寺院の牙を抜いたが、その徹底化は結局、明治初期のタリバニズム（あるいは平田国学的ピューリタニズム）に持ち越されざるを得なかった。そして政教分離にはならず国家が宗教をやったところが、ある意味でイギリスとの共通点である、というような文明論的枠組みを、未整理ながらも構想した。

●六月二十六日記

今日は、Colchesterに日帰り調査旅行をしてきた。特急で四、五十分の距離だが、もうエセックス地方になる。ここはローマ時代の最初の植民市で、Boudicca女王の反乱によって一度は破壊された町だ。ヨークが京都なら、コルチェスターは奈良といった風情である。何でも日本に引き比べるのは良いとは言えないが、とにかくそんな印象を持った。つまり、一段と古くてひなびた雰囲気があるということだ。

Castle Museumは元のClaudius神殿の地盤の上に立ち、町の中心部はすっぽりとローマ時代の町の城壁の中にあって、Colne川を見下ろす傾斜した段丘面に広がっている。元来はケルト・ブリトン時代からのCivitas〔主要集落〕であったが、ローマもまた、よくこの地の利を見抜いてColonia〔植民市〕にしたのである。

博物館の展示は、例によって体験型ストーリーに沿っていて、旧石器～新石器～青銅器〔ビーカー文化〕～鉄器〔ケルト文化〕となぞった後は、ローマ文明の遺物がどっさりとなる。ただそこに、ボウディッカの反乱が加わるのが、ここの特徴だろうか。その後の展開は、サクソン、バイキング、そして中世とお定まりだ。

ところで、私はここで、最初にローマ史に興味を持った時からの懐かしいなじみである、a centurionに、ついに逢うことができた。この人は、その名をMarcus Favonius Facilisといい、ローマの百人隊長としてはおそらく最も有名な人物の一人で、その所以でもある典型的な百人隊長の鎧(Lorica Hamata〔鎖帷子〕)を身に着けている。武具・武器史研究の上からは、その墓石の浮彫像の武装の写実的かつ正確な描写には、決定的なものがある。私が高校から大学の時代にかけてローマ軍団の武装に興味を持つきっかけとなった、その当人の墓石の実物が、ここコルチェスターにあるのだった。浮彫の前で帽子を脱いで、恩人としばらく話をした。「とうとう来たな」と言ってくれたようだった。

しかしながら、イギリス人の熱狂的とも見えるRoman Britain偏愛に接して私があらためて思うに、ブリトンのケルト文化は、今のイギリスにとってはフランスにおけるケルトがそうであるよりはあまり関係がないし（ただしBoudiccaはGallia〔ローマ征服以前および属州時代のフランス、スイス、ベルギーに当たる地域〕におけるVercingetorix〔ガリア諸部族を糾合してユリウス・カエサルと決戦し敗れたガリアの英雄〕とともにロマン主義の双璧として別格だが）、サクソンは残念ながら文化と文明の衰退期としての認識、ノルマン系王朝とカトリックの中世は英国としてはあまり触れたくない（コルチェスターは、反カトリック宗教改革の先駆者であるジョン・ボールとワッ

ト・タイラーの故郷でもある)、そうなるとう結局、ローマン・ブリテンにもっとも比重が置かれるわけだ。そしてそれはまた、ヴィクトリア帝国時代とも平仄が合うことになる。

町を見学した後は、また特急に乗ってRiverpool Street駅まで帰った。沿線の風景はどこも同じで、なだらかな牧草の丘陵が続く中に、村落、たまに領主館、そして丘の地平線の向こうには教会の尖塔が覗いている。近くに見える森には、きっとブリトン人やロビン・フッドが潜んでいるのだろう。

●六月三十日記

一昨日は、V&Aに行った。一九八八年に見学した時とは、当然ではあるがまったく姿が違っていた。ずっと一般向けに、また啓蒙的に展示が変わっていた。

以前は、ずっと見通せる長いcorridorの展示室に、それこそ何千枚というギリシャ陶器が不愛想に雑然とおいてあったというのが印象に残っていて、それがまた素晴らしかったのだが、現在ではいくつかの部屋に分けられて、世界各国の陶器や磁器が美しく整理されて、テーマごとに並べられている。一般の人には非常に親切になったとはいえ、「玉石混淆」の中から逸品を見つける、という百科全書の楽しみと喜びは消滅した。ただ、一つのテーマに沿って万国の品々を並べる、という展示方法は、British MuseumのEnlighted Roomにも見られるが、文化発生論や伝播論の観点からは、あるいは文明論的には良い考え方だとは思う。

それ以外に素晴らしいのは、カロリング朝から中世ヨーロッパにかけての遺物だった。

●七月一日記

今日は土曜日ということもあり、ロンドン市内の西にある、Portobelloのマーケットを訪れた。ここは、骨董その他で大変有名な地区だ。

Tube [ロンドン地下鉄の愛称] の駅を出るときから、もう大変な人出だ。しかも回りから聞こえてくるのは、イタリア語、スペイン語、ロシア語…。半分以上は外国人だ。そして最も大きな勢力はもちろん中国人で、ちょっと覗きに入った骨董店では、一九一〇年か一九二〇年だか製のルイ・ピトンの大きなスーツケースを買う交渉をしていた。女子学生のような人たちも、お洒落な身なりをして歩いている。夏休みに入ったので、大学来欧しているのだろう。

かつては国内移動だけでも大変だった二十世紀の中国（私も留学時代に経験がある）を考えると、まったく今昔の感を催す。

これはしかし博物館参観においても同様で、中高生程度の年齢の生徒たちが、たぶん修学旅行や夏季旅行で、西欧まで見学に来ているのである。おそらく富裕層の子女が入る私立学校では、こうした教育サービスが経営戦略と生徒募集上の売り物なのだろう。

実は日本もこのようにしなければならないはずなのだが、日本の学校も先生も経営者も、ほとんどこういう観点も感覚も持ち合わせない（法制、財政規模、社会的要請、保護者の通念など、さまざまな制約要因もあるのかもしれないが）。他方では、もしこれが卒業記念修学旅行のようなものなのだとすれば、九月始業のメリットというのも実はこのあたりにあるわけで、そう考えると秋季

新年度入学制度は大学だけではなく、むしろ小学校からの段階で実施すべきなのだ。

話を戻して、人波でごった返す通りを歩いていると、青くて丸いプレートが貼られた家が目に入った。ジョージ・オーウェルが住んでいた家なのだ。しかし今では誰も目を留める人もなく、売家となって改装中だった。

●七月二日記

今日は午前中から午後にかけて雨模様、夕方からは晴れたが、空気は冷たい感じだった。

そのような天気ではあったが、ロンドン、セント・パンクラス駅から電車でわずか三十分のところに、St Albanという町に行ってきた。

ここはイギリス最初の殉教聖者である聖オールバンを祭る大聖堂のある場所だが、その歴史は早くはケルト・ブリトン時代にまで遡り、主にはローマ征服時代のVerulamiumという町としても有名である。先のコルチェスターと併せて、これでBoudiccaが蹂躪した三つの町を、すべて制覇したことになった。

着いたのは昼前だった。もう大体、イングランドの地方都市の規模とその距離感が呑み込めたので、駅（たいてい市街地からは離れている）から町の中心まで歩くことにした。

美しいVer川を渡って丘陵を上り詰めると、近世以来の古都を感じさせる町並みがある。ヨークが京都、コルチェスターが奈良なら、ここセント・オールバンは、さしづめ鎌倉か小田原とでも言ったところだろうか。

大聖堂の偉容は素晴らしく、見学したくも思ったが、あいにくちょうど日曜昼のserviceの最中で、帰り道に延ばした。だらだら坂を下りていくと、いかにもイギリスの田舎町らしい、白い壁と黒い梁や垂木の家々が並んでいる。それぞれ色とりどりの美しい花で飾られ、中には通りに面した窓に中国磁器を置いている家などもある。曲がりくねった道を回るたびに、新しい眺めが現れてくる。

途中で驟雨に襲われ、雨宿りをしたりしながら歩いていくうちに、やっと博物館に着いた。Verulamiumのことはよく知らなかったが、実に広大な規模のColonia〔植民市〕であったようで、発掘された遺物はどれも優れたものであった。博物館では、町の子供たちが何かのactivityの発表会で、ローマ時代の衣服を身にまとっていた。

見学も済ませ、今度は外に出て、地勢的な全体像を把握する。ローマのFort〔軍団駐屯要塞〕は、どれも川に向かって下っていく緩斜面に造られていて、ここも例外ではない（ただしVer川は水運には利用されていなかったということである）。現在では要塞の半分ほどが公園になっていて（あとは羊の放牧地や牧草サイレージ地となっており、まるで北海道を見ているかのようだ）、断続的な城壁と、ケルト時代までさかのぼるDitch〔空堀〕も少し残っている。今では一面緑の原をぐんぐんと歩きながら、この下に古代ローマ都市が眠っているのだと思うと、やはり感動があった。

Amphitheatre址も見学し、川の対岸の丘にできた中世以降の町に向けて戻っていく。最後に見残した大聖堂の規模と内陣は、期待以上に素晴らしいものだった。ただイギリスの大聖堂はみなそのようなのだが、宗教改革以降はすべての荘厳が取り払われて、壁画も漆喰で塗りつぶされてしまっ

いる。しかしここはイギリス最初の殉教者の霊堂だけに、さすがにその墓までは取り除くことはできず、また聖人の存在を無視・排除することもできなかったようだ。維持管理しているのは Fraternity of Friends of Saint Albans Abbey という団体で、十九世紀以降、宗教寛容の現在では、カトリックもルター派も使用していると説明されていた。

そうして調査行を終え、まだ明るいうちに帰宅した。

●七月十一日記

相変わらず寒い日々が続き、半袖はとても着られない。百年に一度の異常気象ということだ。一箇月分の雨が一日で降ったりして、各地で洪水の被害が出ている。

今日は、Chester に一泊で来た。ここはローマ時代の軍団駐屯要塞都市で、Deva という町だった。今も中世の城壁がそのまま残り、その一部はローマ時代以来のものである。通りの配置も、ローマ要塞の時代からさして変わらない。闘技場跡も発掘されて保存されている。

ローマ人の土地選定の方式はチェスターにおいてもやはり同じで、これで London, Colchester, St Albans, York, Caerleon, そしてここ Chester とかなり見たことになるが、いずれも川が少し曲がって砂が堆積した緩斜面に、必ず造営されている。

チェスターも、昔はここまで海の潮が上がってきたという。それで船が着くことができて、しかも昔の船の規模だから、リバプールよりもむしろ条件が良かったということになり、そのため、近世まではリバプールよりも繁栄したという（後に砂の堆積で河川港としての機能を失い衰微したということである）。

つまりはチェスターは外洋と内陸の結節点にあたる場所なのであって、したがって河川流通こそが、決定的に重要なのである。ロンドンから乗ってきた汽車の沿線にも、うねうねと続く緑の丘陵の中に、道かと思ったら狭い運河が走っていて、Narrow Boat [狭胴川船、運河輸送船] がいまでも通っている [なお現在では Narrow Boat はリタイアした中高年者のレジャーボートとしての役割を担うことも多く、専門雑誌も刊行されている。一方では、かつての水上生活のまま、船を住宅として固定的に舫っている人々も存在する]。

これが、今回イギリスに来て、私が最も目を開かれた点だ。以前にも指摘したように、その機能は江戸時代の日本のそれと全く同じで、だからチェスターも、日本で言うならば仙台や宇都宮といった都市のような感じがした。

まず博物館を観る。ここも体験型、教育型、interactive 型の展示で、夏休みの生徒たちが詰めかけていた。呼び物は、当然ながらローマ時代である（しかもこの地には Walking Roman Tour まであって、Cassis [兜] と Lorica Hamata [鎖帷子] に身を固めたローマ軍団の百人隊長が、歴史散歩の形で街中を案内してくれる。この日も子どもたちが率いられていた）。

まったくイギリス人は、ローマン・ブリテンが好きだ。つまり、地中海世界と交流して文明につながっていたということが重要なのである。だからサクソン時代はそれなりの評価ではあるのだが（とはいえ、よくても「揺籃」「黎明」、結局は「衰退期」「暗黒時代」としての認識と扱い、ノル

マン時代はゴシック文化の素晴らしさもあるが、フランスとカトリックの影響下で今一つ面白い、チャールズ一世は絶対に評価できないが、クロンウェルは人好きがしない…。それで結局は、エリザベス朝とビクトリア朝において、自分がローマ帝国に成り上がることができたという、その親近感のだと、私には思われるのである（尤もその内実と言えば、ブリトン・サクソンとウェールズとで、どちらがよりローマの文明を受け継いだか、そんなお国自慢競争をしてきたし、今もしているような気もするのだが）。では、Boudiccaはどうか？ これはこれで、また別のロマンだ。

その後は、闘技場跡（Amphitheatreと称しているが、Colosseumだと思う）を見て、ローマ時代を体験しつつ、今なお残る城壁を歩いた。

●七月十九日記

当地は相変わらず寒い天候続きで、今日も暖房を入れ、外も涼しいというよりも寒いくらいで、雨風は強く、散々の有様だが、どうやら来週初め位からジェット気流が南の高気圧に押されて北上するらしく、やっと夏になりそうな兆しだ。それでも気温は、せいぜい二十度ほどであろうか。ともあれ、オリンピックは好天に恵まれるかもしれない。

今日は、大規模再開発著しいキングス・クロス駅の北東隣り、Regent Canalの使われなくなったwharfに、旧貯氷倉庫（後にアイスクリームで大成功した会社の）を利用してひっそりと佇んでいる、London Canal Museumに行ってきた。周辺はいかにも寂れた港町地区（テムズ川は間違いなく港湾と同等の質と機能を備えていた）といった風情だが、少し歩けばそこはもうBloomsbury地区〔ロンドン大学を中核とした文教地区、かつて文人も多数集った〕なのだから、そのアスペクトの急激な変化は面白いものだ。

イングランドの運河発展と河川交通の盛衰の歴史については大変に興味深く、資料も大分買いつめた。それを概観すれば、運河が開削されて全盛期を迎えるのは十八世紀末からのことで、かつてはロンドンからリバプールまでもが内陸運河で結ばれていたということだ。しかしそれも二十世紀初頭には衰退を始め（五大力船の衰退などの日本河川流通水運の盛衰と軌を一にする）、輸送手段として最終的に壊滅するのは、一九六二年から三年にかけての厳冬が引き起こした河川凍結のためということだ。内陸河川交通の話は、C・S・フォレストの「ホーンブローワー・シリーズ」[ナポレオン戦争時代の英国海軍艦長一代記を描いた大河小説]にちょっと出てくるので知ってはいたが、イギリスにおけるかつての重要性というものに、あらためて興味が湧いた。

ところで、こうした河川運送で生計を立て、Narrow Boatで一生を送った水上移動生活者たるCanal Peopleには、かれらの間に生まれ育った特有の文化というものがあり、そこにはどこことなく東欧の香りがするもの、不思議な感じのするところだ。それはたとえば、手持ちの品をすべて極彩色の花模様で彩ったりするところに表われていて、見方によってはそれはパキスタンからアフガニスタンにかけての高山ルートを走破する輸送トラックに施された、派手な装飾すら思わせる。

もちろん事實は、所有物を持ち運べる量におのずから制約のあるこうした人々の感覚は、いづこであれ大なり小なり似てくるということなのであろう。ちなみに、かれらCanal Peopleのお気に入り

りの装飾品であるリボン皿は、ボヘミア製だということだ。

このかつて栄えた内陸水運が、そっくりそのまま、十九～二十世紀イギリスの複雑重厚な鉄道網に移行したのだと思うと、その成り立ちがよくわかる。これがイギリス大英帝国経済発展の一つの關鍵であると、私は考えるようになった。そして、実はこれが大陸～ユーラシア、つまりシルクロード経済の末端毛細血管ともなっていたと思うようにもなった。つまりCanal Peopleは、極端に言えば、シルクロードの最西端を担う運輸業者だったのである。

これについては、引き続き考えをまとめてみるつもりである。ともあれ、島国イギリスは実は河川国家であり、ロンドンの水の都であったことがわかったというのが、今回の最大の収穫であった。

●七月二十七日記

今回は、テレビで観た、オリンピック開会式の感想を記しておく。

開会式については、その評判に毀誉褒貶はあれ、ユーモアとウィットがあって、私は楽しんだ。トーチ・リレー（蛇蝎のごとく嫌われ恐れられたバイキングのデーン人であっても、今となってみれば英国を作った一員だ、などという風な融和的演出が随所にあった）の際にも思ったところであるが、現在のイギリスの一番言いたいことは、英国の歴史には良きも悪しきもさまざまあったけれども、それは認めた上で、もうどうしようもないことではないか。多文化・多民族併存こそが、今の、そしてこれからのBest of Britishなのだから、もうそれを目指していくしかないではないか、ということなのではないだろうか。

しかし、もしもこれがユーロ圏であつたら、いったいどうなっていたであろうかと思う。見方によっては、ポンドの方がはるかに柔軟かつ可塑的な世界通貨性を持っているし、島国から七つの海に飛躍したイギリス人は、所詮は大陸の枠内に自らを閉じ込めたフランク人ではないという文明論的仮説を、オリンピック開会式をきっかけに、未整理ながらも考えてみたところだった。

●八月六日記

スコットランド旅行の終わりに際して、グラスゴーからエジンバラまでの道中で興味深いところに寄ったので、そのことを記しておく。

その場所は、Clyde川溪谷にあるNew Lanarkという名の村で、十九世紀の綿業資本家で社会改良家であるRobert Owenの工業協働体が置かれ、実践されたところである。オーウェンはその後アメリカにも渡り、失敗はしたものの、New Harmonyという協働体を作っている。またCo-opの原型を作った人でもある。

オーウェンとその事業についてはこの分野の日本人研究者には常識であり、英国に次ぐ規模の研究会有るほどに影響を与えた人物でもあるのだが、私にとっては殆ど初めてに近く、大いに感動し、また勉強にもなった。日本語のパンフレットや案内も揃っており、係員に「日本人は来ますか」と尋ねてみると、「大勢来ます」と言っていた。

溪谷の滝の水力を利用して産業革命期に製綿工業資本を営んだというのは、思えば後の群馬県富

岡の製糸場の祖先でもある。また、伝記を読む限り、あまりに神話的・牧歌的にすら見える（古典古代風子ども体操着、歌とダンスの情操表現教育重視）ユートピア協働体を作って維持できたのは、無理な共有化・集産化をしなかった、つまりコルホーズにしなかったからだ、私と思う（これをして失敗しなかったのはヘイロータイに依存した古代ギリシアのスバルタだけだろう。オーウェンもこれを夢見たときに、挫折への轍を踏んだようだ）。社会主義は全部これで破綻して、結局は開発独裁・封建全体主義へと戻ってしまったわけだ。またマルクスは、むしろこうしたオーウェンのモデルを知っていただけに、社会発展を楽観的に図式化しすぎたのではないだろうか。

ひるがえって日本を考えると、明治維新を実現させたのは、マニファクチュア段階から産業資本家になりかけていた開明的地方有力者（豪農・豪商層、平田国学者→プロテスタント的、タリバンの、ナショナリスト的、新選組を支えた多摩の自由民権主義者＝武相壮士たちもこの系譜に連なる）だったが、かれらは所詮、下級武家出身の明治新政府の中央集権的・ビスマルク主義の開発独裁に潰されて没落し（島崎藤村の『夜明け前』にはその葛藤が描かれる）、それでも何とか普通選挙権要求・議会主義にまでこぎつけた時には、すでに大正期工業化の中でプロレタリアートが出現していて、ジェントリーたちは国権論者としてかれらの敵に回らざるを得ない立場に立たされてしまうのだ。

だから日本では、労働者の救世主として資本家が存在しうる、オーウェンのユートピアは実現し得ない。ただその残滓は、かろうじて白樺派の「新しき村」や、有島武雄による北海道の小作人解放や、宮澤賢治の「羅須地人協会」として姿を見せるのみだ。

この地を見学できたことも、またイギリスにきた大いなる収穫の一つであった。

ちなみに、New Lanarkは現在ではユネスコの世界遺産としてすっかり観光地化しており、結婚式のできるホテルからありきたりの土産物までがそろっていて、もしもオーウェンが見たら嘆くかもしれない。

●八月十三日記

ロンドン・オリンピックは、心配されたテロもなく、無事に閉会した。

閉会式について大雑把に言うならば、Paganのfire feastだという印象だ。それで全体のコンセプトは、「イギリスは庶民の国である」という開会式に引き続くメッセージであり、その点からしても結局はDickensの世界の外には出られないわけで、したがって節目節目には、どうしても庶民代表のBeatlesの曲が入ってくる。後は例によって、Roman BritainからBoudiccaまで駆出しての自国史パロディで（Monty PythonのEric Idleがやはり登場した）、他国・他文化の人には判らない部分も多かったことだろう。

とはいえ、別にこうしたページェントなどなくてもいいとも考える。昔にはそんなものはなかったと記憶しているし、儀典と競技だけで十分だ。

後は、近頃のオリンピックそのものに関して言うならば、勝者が派手なジェスチュアをして誇ったり、国旗を体に巻いたりするのには、どうしても違和感を覚える。態度がdecentでないからだ。

東京オリンピックの記録映画を見ると、勝者はむしろ首をうなだれて悲しげですらあり、それを敗者が慰めるという風な様子に見える。つまり、山に上れば後は下るしかないし、月は満ちれば必ず欠ける。勝者はむしろその運命を恐れて悲しむのであり、敗者はその悲しみに共感して、勝者の不安を癒すのである。これこそが古代ギリシアの神話的精神、すなわちオリンピックの真髓だと、私は思う。そこでは、勝負は自分の力の結果だけではないのである。

オリンピックが商業化し、アマチュアリズムが風化し始めたところから、オリンピックはそれを忘れたのだろう。だからドラマチックを求める際には、競技そのものではなくてページェントに頼るしかなくなり、しかもページェントはますますどぎついpaganismに傾いていく、という図式になる。文明論的観点からすれば、それはあだかもローマの衰退とさも似たり、といったところだ。

●九月十日記

パラリンピックも閉幕し、これでJubilee以来延々と続いてきた祝祭も、ついに終焉した。よくも英国人は、これだけの長期間、格調を失わずに上手に楽しんだものだと、それだけは感心する。楽しみ方を知っているというのは、まさに文化であり洗練だ。しかも、「祭りの後」(政治、経済)も、また結構うまく行きそうでもある。

今回の調査行では、帰国準備の気忙しい中を縫って、九月七、八、九日と、NorthumberlandのHadrian's Wallを訪ねて、CarlisleからNewcastleまでを、西から東へと、バスと汽車で横断してきた。バスにはAD112という洒落た便名がついている〔紀元一一二年とはローマ皇帝ハドリアヌスが長城建設を発令した年〕。Rover Pass〔風来坊通行券、つまり定額乗り降り自由切符〕を買ってうまく利用すれば、大体の名所は回ることができるようになっている。

Hadrian's Wallは、大学生時代以来、かねて訪ねてみたいと願っていたところだが、よもや生きているうちに現実にその地を踏むことができるとは思ってもいなかった。というのも、当時の写真の資料を見る限りでは、この地はいまだ荒れ果てた辺境で、Scotlandのglen〔氷河の刻んだ峡谷地形〕にも似た、牧草の生い茂る雄大な丘陵と森林、そしてしばしば深い谷が続き、しかも長城はまさにその丘陵の尾根に造営されていて、整備もまるで進んでいないようだったからである。

ところが現在では、AD112バスは日に何本も往復し、WallもFortも発掘整備が進み、遺跡毎にある展示博物館は充実して資料にも土産物にも事欠かず、併設されたテラスではお茶や軽食まで摂れる。観光ポイント毎には駐車場もあり、高級車で乗り付ける年配の夫婦すらいるという有様だ。そうしたわけで、俗化したとまでは言わぬものの、荒涼どころか行楽地としてすっかり飼い慣らされた感のある場所に、Hadrian's Wallはなくなってしまっていたのだった。とはいえそのために失望したというわけでは全くなく、長城の地勢的条件、また駐屯要塞の設備や構造、そして出土遺物などから学ぶものは多数あった。

加えてここは、Trail Routeとして最適で、両手にストックをついた老若男女のハイカーたちが、長城に沿った、あるいは丘陵を横断するPublic Footpathを、嬉々として歩いていく。

つまりこれを一言で表すならば、英国人の最も好きなactivity、すなわちアウトドアと歴史探訪

を同時に楽しめるといふ、願ってもない、また申し分のない条件を、このHadrian's Wallは兼ね備えているというわけで、あまつさえそれがRoman Britainなのだから、その味わいは猶更堪えられないことだろう。なんとなれば、こここそがローマ帝国の最果てで、Barbariansとの境界であったということを実感し、大陸からはともすれば田舎者扱いされる英国（真の「英国史」は皮肉にも、むしろローマ撤退後から始まるのだが）も、少なくともここまでは同じ文明の一員であったという事実を、じかに確認できるのだ。

しかもその「ローマ」とは、また「ローマ人」軍団兵〔含Auxilia＝市民権を持たない非ラテンの補助軍団兵、「援軍」とも訳される〕とは、実ははるか東方からも派遣されてきた、オリエントやヘレニズムの文化を伝えるコスモポリタンなのである。

その姿は、まさに多文化・多民族から成る現代のBritishそのものであり、だからそれを見据えるということは、はしなくも同時に、七つの海を支配したビクトリア帝国の後ろめたさすらも、この際いささか払拭できるというものではないだろうか。

実はそうした感覚が、今度の女王即位六十周年記念ジュビリー祝祭の盛大な喜び、また開会式・閉会式に見られたロンドン・オリンピックのコンセプト、さらにはTeam BritainやParalympic Britain〔オリンピック・パラリンピックに際して結成された連合王国合同選手団〕の中にも流れていたのではないかと、私は思うのだ。そうしてそのことによって、クロンウェル以来、ディケンズ、オーウェン、オーウェルと脈々と流れる市民・庶民国家意識の系譜にも、再び新しく世界的普遍性を持った命が吹き込まれるのではないかと考えるのである。

●九月二十一日記

イギリス滞在も、いよいよ秒読みとなった。

今日は、滞英研究の掉尾を飾るにふさわしい場所として、ロンドン北東郊外のWalthamstowにある、William Morris Galleryを訪れた。ずっと行きたかったところだった。

ここはウィリアム・モリスの生家の屋敷で、長らく改装中であつたが、今年の八月にリニューアル再開した。そのためここも御多聞に漏れず、教育的・インタラクティブな記念館にすっかり変身して、今日もどこかの学校の子供たちが引率されて、課題を片手に大勢参観に訪れていた。

ウィリアム・モリスがどのような人物であつたかはここで改めて触れるまでもないが、裕福な実業家の子弟として生まれた人で、元来蒲柳の体質のためか専ら読書に親しみ、七歳頃にはウォルター・スコットの英雄小説などに読み耽つたそうで、かれの西洋中世趣味はすでにこの時に出来上がったものだろう。長じては鍛冶屋に中世鎧の複製を作らせて、届いたら早速身に着けて鏡に映して悦に入つたと言うから、かなりナルシストでもあつたことは確かである。

生来の芸術的天分に恵まれ、審美眼も確かで、オックスフォードに進学したエリートだったが、親譲りの商才もあつて実業面でも成功し、ラファエル前派のロセッティや進歩的貴族に取り入るだけの外交感覚も持ち合わせていた。ヴィクトリア女王にも気に入られ、V&Aの基礎造りへの貢献は知られるところである。

これを要するに、趣味が嵩じて実益にもなった人で、その人生後半は、この時代の文化人のお定まりである社会主義者へのコースを取ることにになり、カール・マルクスの娘とも親交を結ぶ。このあたりは、どこかロバート・オーウェンとも共通するような感じがある。かれが死去した際の医者言葉によれば、「死因はひたすら、ウィリアム・モリスであったことに尽きる。なんととなれば十人分の人生を生きたのだから」というのは、かれの生涯について、まさに言い得て妙であろう。

時代的な制約もあったが、この人の視野が日本民芸にまで及ばなかったのは、日本人としては残念なところだ。あと三十年あればとも思う。しかし考えようによっては、理想を追うままで終わることのできた夢想家として、水晶宮焼亡に象徴されるが如き二十世紀の暗雲が立ち込めるのを見ずに生涯を送ったのは、むしろかれの幸福であったかもしれない。

ところでいま、かれの眼は日本にまで届かなかったと書いたが、モリスは実際にアイスランドを除いては（ここは英国では失われたゲルマン・バイキング的中世がそのまま残存したindigenous地域と考えられる）国外に出たことはなく、ましてやロココから印象派までの近世・近代フランス芸術には、目もくれていないようだ。

この点からすれば、モリス（およびその感覚、あるいはラファエロ前派も含めて）は、明らかに西欧の中では「異色」「異質」「異端」「田舎者」「辺境者」であって、それを受け入れた英国自身もまた大陸から田舎者扱いされるのも、何やら理解できるような気がする。

しかし一方では、モリスはインドやペルシアの染物や絨緞には大いに影響を受けており、それが意味するのは、かれが東方的・ビザンツ的装飾性とその抽象感覚には、極めて共鳴したということである。

のみならず、東西交渉学的研究がいまだ深化していないこの時代にあって、モリスは直観的・感覚的にアーサー王的西欧中世とペルシアとに目をつけたということになる。ところで、もしこれを現代最新の歴史学的・考古学的研究が述べているところと結びつけると、すなわち、ローマ帝国後半期からゲルマン侵入時代以後の西欧文化再構築の背景には、ゲルマン人とも深く融合したイラン系遊牧民であるサルマート族〔ゲルマン侵入時代のアラン人、現代コーカサスのオセット人が相当する。オセット人は漢代中国の烏孫であり、かれらと近いトハラ人は月氏にあたる。その月氏はまた、三種の神器を有し、百済とも文化的紐帯を持っている〕を介したササン朝ペルシアの貴族的文化の存在が欠かせないものであって、それがアーサー王伝説のかなりの部分の原型となり（論者によっては、それは古墳時代日本列島文化にまで及んでいると言う。例えば、アーサー王とヤマトタケルは同一英雄神話が東西に広がったものだと言うのである）、遂には西洋中世騎士道を形作っていくというわけである。

では、なぜイギリスは他の西欧と違ったところがあるのか、なぜ大陸からともすれば田舎扱いされるのか。またなぜイギリスがローマン・ブリテンにあれば憧れるのか。

それは、モリスの直観・慧眼がはしなくも見抜いたように、英国はユーラシア最後の辺境、ローマ帝国最後の辺境、いわば「最後のサルマティア」だからなのである（ここでCanal Peopleが思い出される。また奇しくもHadrian's Wallには、サルマート騎兵が駐屯していた）。

私はロンドンに滞在してからというもの、このことが脳裏に生まれ、つねに去らなかった。しかし今日、モリス・ギャラリーを参観して、そしてウィリアム・モリスという天才を介して、ようやくこれで英国とシルクロードとの関係性、さらにはユーラシア全体を考えるに当たっての、一つの平仄がつけられたというような気がしている。

三. 結語

大英博物館においても感じ、またロンドン大学SOAS図書館で読んだ幾つかの文献からも読み取れた所からすれば、今後の二十一世紀における世界観・地政概念としての「アジア・ヨーロッパ」という二項対立は、最早古いものとなった（つまりは、「世界の中のアジア・アジアの中の日本」といった枠組みと位置付けも、今世紀初頭の十年を経過して、いささか通用し難くなってきたということである）。

現在のヨーロッパは、すでに一定地域としては土崩瓦解の状態にある（ユーロ危機以外の現今の課題は、革命以来二十年を経過したにもかかわらずなお洗練度・成熟度について劣位に立つ中欧・東欧を如何に吸収するかということである）。かつて世界を植民地とした西欧は、もはや「旧宗主国と被支配地域」といった状態をとうに飛び越えた「世界」になってしまっている。それはローマ帝国がヒスパニアやアフリカといった属州出身の皇帝を戴いた状況にあだかも類似するが、現代欧州はそれ以上に多文化・多民族・多言語であって、最早ヘレニズム的「コイネー世界」ですらなくなっている。われわれは、そうした観点から、「ユーラシア」をholisticに捉える必要があるだろう。その動静に変転常ないイスラム地域、就中イラクとアフガンの問題も、この視点からすれば、百年を超えるスパンで眺めないと、その判断を誤ることになる。

そして前言でも述べた如く、今や相互憎悪的地域紛争の瀬戸際にある東アジアにまで、こうした視線によるユーラシア的地政観の潮流が、果して及んでくるか否か。またそのことによって、現下の緊張が果して緩和されるか否か。そしてそこでの日本のアイデンティティは、果して如何なるものとなるのか（現代日本に対する現代欧州・現代英国のamazementを、日本自身はけして驕傲・自尊ではなく認識し、しかしそれを必要以上に意識することなく、また敢えて自ら発信することなく外部が発見するままに任せつつ、自国文化を創造していくべきなのではなからうか。これ即ち、永遠のJaponismということである）。

そうした問題意識を持ちつつ、本学部奉職以来、研究および教育のテーマとして携わってきた（本学部設立記念出版の共著『21世紀アジア学』〔成文堂〕担当執筆部分をも参照されたい）ユーラシア東西文明論を、このたびの滞英成果を踏まえた上で改めて再構想・再構築せんと、当論筆者は、差当り考えているのである。